日本語と韓国語の文末形式に関する対照研究
―「知覚表明」と「知識表明」の概念を中心として―

文 彰鶴

要旨

本稿では日韓両言語の文末形式を取り上げ、その対応関係を考察する。

・日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の間には有意義な対応関係が見られず、日本語の平叙文の断定形の意味分類(「知覚表明」と「知識表明」)と韓国語の終結語尾が担う意味の間において、より密接な対応関係が見出された。

・日本語では 断定形で「知覚表明」と「知識表明」の違いを表すことができるが、韓国語では終結語尾の選択によって両者を区別している。

・ 驚き・戸惑いを表す感動詞、また断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞との共起関係において、日本語の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾が平行していることから両者の対応関係が検証される。

キーワード：終助詞，断定形，終結語尾，知覚表明，知識表明

１．はじめに

本稿では、日韓両言語の文末形式を取り上げ、その対応関係を明らかにすることを目的とする。

次のように日本語と韓国語における述語の文法カテゴリーに関する分析を見ると、日本語の終助詞群と韓国語の hay(yo)体の終結語尾群[1)2)]（-ney、-kwun、-ci、-e など）が聞き手めあてのモダリティ(つまり発話・伝達のモダリティ)を表す形式として対応しているように見える。

(1)「彼に見られていなかったでしょうね。」　(仁田 1997:142 をまとめて引用、太字は引用者)

[[[[[[[見] ラレ] テイ] ナカッ] タ] デショウ] **ネ**]

[[[[[[[[語根] ヴォイス] アスペクト] みとめ方] テンス] 事態めあてのモダリティ] **発話・伝達のモダリティ**/丁寧さ]

(2)[[[[[[[[[[[[[[잡]히]시]지 않]게 해] 버리]고 말] 수 있]지 않]으시]었]겠]**지**]요]?

cap-hi-si-ci anh-key ha-y peli-ko ma-l su iss- ci anh-usi-ess-keyss-**ci**-yo[3)]?

[[[[[[[[[[[[[動作命名(ツカマエル)] ヴォイス(受身サレル)] 尊敬(対動作主体)] 否定] ヴォイス(使役サセル)] シテシマ] 可能(シウル)] 否定(反語)] 尊敬(対使役主体)] 時制(過去シタ)] 非文末ムード(対事態モダリティ＝将然性判断デショウ)] **文末ムード(対聞き手モダリティ**＝確認デショウ-丁寧・疑問(デスカ))]

(お捕まえられにならないようにしてしまうことも、おできになったのではありませんでしょうか？)　(野間 1997:120 をまとめて引用、太字は引用者)

従来の研究でも、日本語の終助詞と韓国語の hay(yo)体の終結語尾を対応させて考える、あるいはその対応関係を論じているものが多い[4)]。しかし、実際の文を見ると、そうではない例もよく見られる。例えば、次は、日本語小説の原本と韓国語の対訳本の例であるが、日本語では断定形で終わり終助詞がないのに対し、韓国語では hay(yo)体の終結語尾が使われている。日本語の断定形に対して、(3)では韓国語の hay(yo)体の終結語尾 -ney が対応しており、(4)では-ci が対応している。

(3) a.「気分悪そうですね。人がいるのが鬱陶しいという顔をしている」【頬】

b.″…略…사람이 있는 게 성가시다는 표정이네요.″【볼】

salam-i iss-nun-ke-y sengkasita-nun phyoceng-i-**ney**-yo.

[人-が　いる-連体修飾-こと-が　鬱陶しい-という-表情-指定詞-終結-丁寧さ]

(4) a.「私達のお父さんとお母さんは、どんな人達だったの？」

「優しい人達だったよ。…略…私達はみんなで、庭に池のある家に住んでいた。」【哀】

b.…略…″정원에 연못이 있는 집에서 살았지.″【슬】

cengwen-ey yenmos-i iss-nun cip-eyse sal-ass-**ci**.

[庭-に　池-が　ある-連体修飾　家-に　住む-過去-終結]

このような例からも分かるように、日韓両言語の文末形式の対応関係を分析するためには、日本語の断定形と韓国語の hay(yo)の体の終結語尾との対応関係も考える必要があるように思われる。

そこで、本稿では日本語の断定形とそれに対応する韓国語の hay(yo)の体の終結語尾に焦点を当て、その対応関係について考察したい[5)6)]。

２．日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の対応関係

本節では、まず従来の研究でよく指摘された、日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の対応関係について検討しておきたい。そのために、文成立と相互承接に関する言語現象

と日韓対訳本の対応関係を調べる。

２．１　文成立と相互承接に関する言語現象

日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の文法的な振る舞いを先におさえておく。まず日本語の終助詞は、文にとって付加的な要素であるが、韓国語の終結語尾は文成立のための必須要素である。(5)のように、日本語の終助詞はなくても文として成立するが、韓国語の終結語尾はないと文として成立しない。

(5) a. 雨が降っている**{Ø／よ／ね}**。
　b. 비가 내리고 있**{*Ø／어／지／네／군}**.
　　pi-ka nayli-ko iss**{*Ø／-e／-ci／-ney／-kwun}.**
　　［雨-が　降る-アスペクト-終結］（雨が降っている。）

また日本語の終助詞の一部は相互承接可能であるのに対して、韓国語の終結語尾は相互排他的である。(6)のように、「ヨネ」と「ワネ」など、日本語の一部の終助詞においては相互承接ができるが、韓国語の終結語尾は「어지(-e-ci)／지네(-ci-ney)」といった相互承接が全くできない。

(6) a. 雨が降っている**{よね／わね／わよ／わよね}**。
　b. 비가 내리고 있**{*어지／*지네／*네군／*지군}**.
　　pi-ka nayli-ko iss **{*-e-ci／*-ci-ney／*-ney-kwun／*-ci-kwun}**.
　　［雨-が　降る-アスペクト-終結］（雨が降っている。）

このように日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の間では文法的な振る舞いに異なりが見られるという点からも、両者を単純に対照することへの疑問が生じる。そこで、次に実際の言語資料の使用例を通して、両者の対応の状況について確認してみることにする。

２．２　日韓対訳本における調査

日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の対応状況を確認するために、日本語の現代小説8作品とその韓国語による対訳本[7]を用い、会話文に現れる平叙文3856例を対象として、対照調査を行った。表１は日本語の小説作品の中で使用数の多かったネ、ナ、ヨネ、ワという終助詞、また終助詞の付いてない形(以下無終助詞)が、韓国語の対訳本ではどのような hay(yo)体の終結語尾(-ney、-ci、-kwun、-e)[8]で訳されているかを調べた結果である。

表 1. 日本語の終助詞・無終助詞と韓国語の終結語尾の対応

対訳本＼原本	ネ	ナ	ヨ	ヨネ	ワ	無終助詞
-e	89(28.1)	64(38.1)	746(86.7)	17(27.4)	165(88.2)	1894(83.7)
-ci	77(24.3)	38(22.6)	89(10.4)	32(51.6)	15(8.0)	264(11.7)
-ney	65(20.5)	25(14.9)	10(1.2)	6(9.7)	5(2.7)	43(1.9)
-kwun	86(27.1)	41(24.4)	15(1.7)	7(11.3)	2(1.1)	61(2.7)
計(%)	317(100.0)	168(100.0)	860(100.0)	62(100.0)	187(100.0)	2262(100.0)

表 1 を見る限り、特定の終助詞と特定の終結語尾が明確に一対一の関係で対応しているというような事実は観察されなかった。例えば日本語のネとナは、韓国語の-e、-ci、-ney、-kwun におおよそ同じ割合で訳されているので、日本語のネやナが韓国語の特定の終結語尾に対応しているとは言えないだろう。確かに、日本語のヨ、ヨネ、ワ、無終助詞は、共通して-e と-ci に訳されている割合が高いといった傾向は見られる。しかし、このような傾向を見ても、特定の終助詞と特定の終結語尾が対応しているとは言いにくいだろう。次のように日本語のネの対訳例を代表としてみると、原本での終助詞ネが韓国語の対訳ではそれぞれ異なる終結語尾-e、-ci、-ney、-kwun で訳されていることが分かる。他の終助詞の対訳例においても同様の状況であった。

(7) **[①ネ－-e/②ネ－-ci/③ネ－-ney/④ネ－-kwun]**

① a. 「写ってないね、お父さん。一枚も」【ブ】

b. ″안 찍혔어, 아버지는. 한 장도.″ 【브】

an ccikhy-ess-e. apeci-nun. han cang-to.

［否定　撮られる-過去-終結. お父さん-は. 一枚-も］

② a. 「いい人だったけど、親父も早く死んだね」【頬】

b. ″좋은 사람이었지만, 부친도 일찍 돌아가셨죠?″【볼】

cohun salam-i-ess-ciman, puchin-to ilccik　tolakasy-ess-ci-yo.

［いい　人-指定詞-過去-接続、お父様-も　早く　亡くなる-過去-終結-丁寧さ］

③ a. 「みんな駅に向かってるね、この流れに乗って一緒に歩こうよ、お祭りみたいで楽しいじゃん。」【蹴】

b. ″사람들이 전부 역으로 가고 있네. …略…″ 【발】

salamtul-i cenpu yek-ulo ka-ko iss-ney.

［人々-が　全部　駅-に　行く-アスペクト-終結］

④ a. (相手に色々質問されて)「おまえって、結構スルドく大人を問いつめるね」

b. ″너도 참, 예리하게 어른을 추궁하는구나[9].″ 【브】　　【ブ】

ne-to cham, yeylihake elun-ul cukungha-nun**kwuna**.

［お前-も　本当に、鋭く　大人-を　問いつめる-終結］

以上、日韓対訳本の調査の結果からも、 日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の対応関係に、やはり疑問が残る。

３．日本語の断定形と韓国語の終結語尾の対応関係

本節では、日本語の断定形と韓国語の終結語尾に注目して、その対応関係を検討する。日本語の原本で、日本語の断定形[10]の文、2262 例（表 1 の無終助詞の例）が、韓国語の対訳本ではどのような終結語尾（-ney、-kwun、-ci、-e）に訳されているかを調査した。

例文を分析した結果、-ney・-kwun に訳されている場合と-ci に訳されている場合では意味的に対立していることが分かった。そして、-e に訳されている場合においては-ney・-kwun と-ci の意味的な対立に対して中立的であることも分かった。

まず、日本語の断定形が-ney と-kwun に訳されている場合を見ると、文の内容が話し手が発話時に視覚や聴覚などで捉えて、新たに知った内容であるという特徴がある。

(8)①a. ふと洗濯物の襞をめくってみると、外から、夕陽の黄色い光の筋が部屋に差し込んだ。　「夕暮れが始まってる。分かんなかった……。」【蹴】

b. …略…″해가 지기 시작하**네**. …略…″　【발】

hay-ga ciki sicakha-**ney**.

［日-が　暮れ始める-終結］

②a. 「気分悪そうですね。人がいるのが鬱陶しいという顔をしている」【頬】

b. ″…略…사람이 있는 게 성가시다는 표정이**네**요.″　【볼】（(3)再掲）

salam-i iss-nun-ke-y sengkasita-nun phyoceng-i-**ney**-yo.

［人-が　いる-連体-こと-が　鬱陶しい-という-表情-指定詞-終結-丁寧さ］

(9)①a. （相手の身分に関する書類を見ながら）【五】

「国民兵士の報告によると、突然出現したということになっている。…略…」

b. ″국민 병사의 보고에 의하면 돌연 출현했다고 되어 있**군**. …略…″【오】

kukmin pyengsa-wi poko-ye wiha-myen tolyen chulhyenha-yss-ta-ko toi-e iss-**kwun**.

［国民兵士-の　報告-による-接続　突然　出現する-過去-終結-と　なる-アスペクト-終結］

②a. （２人がけんかしながら）「そんなこと子供だってしやしないよ。考え過ぎるな」「考え過ぎてなんかいないわ。そっちこそ向きになってる」【頬】

b. ″…略…당신이야말로 정색하고 있**군**. ″【볼】

tansin-iyamallo cengsaykha-ko iss-kwun.

［あなた-こそ　向きになる-アスペクト-終結］

(8)と(9)は、日本語の断定形に-ney と-kwun が対応している例であるが、発話時に話し手が視覚で捉えた眼前の事態(夕暮れ(8①)・相手の表情(8②)・見ている書類の内容(9①)・相手の様子(9②))をそのまま表している文である。このような文脈においては、韓国語の訳を-ci にすると不自然となる。

次に、日本語の断定形が-ci に訳されている場合を見ると、文の内容が話し手が発話時以前から既に知っていた内容であるという特徴がある。

(10)①a.「二十歳のころ、なにしてた？」…略…「本ばかり読んでた。」【東】

b.″책만 읽었지.″

chayk-man ilk-ess-ci.

［本-ばかり　読む-過去-終結］　【동】

②a.「私達のお父さんとお母さんは、どんな人達だったの？」

「優しい人達だったよ。…略…私達はみんなで、庭に池のある家に住んでいた。」【哀】((4)再掲)

b.…略…″정원에 연못이 있는 집에서 살았지.″【슬】

…略…cengwen-ey yenmos-i iss-nun cip-eyse sal-ass-ci.

［庭-に　池-が　ある-連体　家-に　住む-過去-終結］

(10)は、日本語の断定形に-ci が対応している例であるが、話し手の過去の経験(10①)や過去の記憶(10②)であって、話し手にとって既に知っていた内容を表している文である。このような文脈においては、韓国語の訳を-ney か-kwun にすると不自然となる。

最後に、日本語の断定形が-e に訳されている場合を上の-ney・-kwun と-ci の場合と比べると、-e に訳されている場合は、文の内容が発話時に知覚で捉えた内容であれ、発話時以前から知っていた内容であれ、双方とも表すことができるという特徴がある。

(11)①a.枕の傍らに置いてあるお茶の入ったグラスに妙な物を発見した。

「氷の中にアオムシ入ってる。」【蹴】

b.…略…″얼음 속에 애벌레가 들어 있어!″【발】

elum sok-ey yapeley-ka tul-e iss-e.

［氷-中-に　アオムシ-が　入る-アスペクト-終結］

②a.「あ，そうだ」カスミは、バッグから封筒を出した。

「大塚さんにこれを戴きました」【頬】

b.…略…″오츠카 씨에게서 받았어요.″【볼】

ochukha ssi-eykeyse pat-ass-e-yo.

［大塚さん-から　戴く-過去-終結-丁寧さ］

(11)は日本語の断定形に-e が対応している例であるが、発話時に視覚で捉えた内容を表すこともでき(目の前のグラスの様子(11①))、過去の経験を表すこともできる(11②)。

以上のように、日本語の断定形と韓国語の終結語尾の対応を見ると、中立の場合もあるが、有標の場合は「発話時に知覚で捉えて、新たに知った内容」であるか、それとも「既に知っていた内容」であるかという区別が重要であるように考えられる。

実際に、韓国語の終結語尾と日本語の断定形に関する分析でも、相通ずるような分析があった。その分析内容を簡単に確認すると次のようである。

まず、韓国語の終結語尾の各形式に対する見解はさまざまであるが[11]、Jang,K.H.(1985)、Park,J.Y.(2006)は、-ci は既に知っていることを述べるのに対して、-ney と-kwun は新たに知ったことを述べるとしている[12]。

(12) 내가 어젠 아파서 병원에 갔지.　　(Park,J.Y.2006:202)

nay-ka ecey-n aph-ase pyengwen-ey ka-ss-ci.

［私-が　昨日-は　痛い-接続　病院-に 行く-過去-終結］

(私は昨日体の具合が悪くて病院に行った。)

(13) 옷에 냄새가 많이 {나는구나/나네}.　　(Jang,K.H.2006:230)

os-ey naymsay-ka manhi {na-nukwuna/na-ney}.

［服-に　匂い-が　たくさん　する-終結］

(服から匂いがたくさんするね。)

以上のような-ney、-kwun、-ci(-e を加えて)の意味的な関係は次のようなミニマルペアによっても確認できる。

(14) 이제 보니까 쟤가 여기 와 있 {구나/네/어/??지}.

ice po-nikka cyay-ka yeki w-a iss{-kwana/-ne/-e/??-ci}.　(Jang.K.H.1985, Park.J.Y.2006 一部改変)

［今 見る-接続 あの人-が ここに 来る-アスペクト-終結］

(今見てみたら、あの人がここに来ているね。)

(15) 나는 순이가 무엇을 하는지 오래 전부터 알고 있어. 걔는 공장에를 다니고 있{??구나/??네/어/지}.　(Jang.K.H.1985, Park.J.Y.2006 一部改変)

na-nun suni-ka mues-ul ha-nunci olai cen-pute al-ko iss-e. kyay-nun koncang-e-lul tani-ko iss {??-kwuna/??-ne/-e/-ci}.［私-は スニ-が 何-を する-か 昔-から 知る-アスペクト-終結。

その子-は 工場-に-を 通う-アスペクト-終結]

(私はスニが何をしているか、昔から知っている。その子は工場に働きに行っているよ。)

(14)の文は「今見てみたら」から分かるように、発話時に視覚によって新たに知ったことを表す内容であり、このような文では-ney と-kwun は自然で、-ci は不自然である。それに対して、(15)の文は「昔から知っている」から分かるように既に知っていることを表す内容であり、このような文では-ci は自然で-ney と-kwun は不自然である。新たに知ったことを表す内容であれ、既に知っていることを表す内容であれ、-e は自然である[13]。

一方、日本語の平叙文の断定形の意味分類にもいくつかの方法がある。代表的なものとして平叙文の述べ方による分類がある。例えば「判断文」「現象文」といった区別[14]が一般的なものであるが、このうち、いわゆる「現象文」と言われる文は、発話時に認識した眼前の事態をそのまま表現する「眼前描写文」と、話者が既に知識として定着させている事柄を述べる「知識表明文」とに区別できるという指摘がある[15](丹羽 1988、田野村 1990 参照)。

(16) おや、花が咲いている。　【眼前描写文】(丹羽 1988:47)
(17) おい、きのう太郎が来たぞ。　【知識表明文】(丹羽 1988:48)

本稿でも、平叙文の断定形におけるこれら二つの意味に対して基本的に同じ立場である。ただし、用語において「眼前描写」というと視覚的に捉えるという意味に限定されやすいので、全ての感覚を含むという意味から「知覚表明」と改め、「知覚表明」と「知識表明」を次のように規定する。

(18)知覚表明は、話し手が発話時に感覚器官によって知覚した内容を表すことであり、知識表明は、話し手が既に知識として定着させている内容を表すことである。

以上のような分析を見ると、日本語の平叙文の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾が担う意味の間には、何らかの関連性があると考えられる。

そこで、「知覚表明」であるか「知識表明」であるかという区別を重視し、終助詞の有無と関係なしに「知覚表明」の文と「知識表明」の文とに明らかに区別できる 1441 例を対象として[16]、それらが韓国語の対訳本ではどのような終結語尾(-ney、-ci、-kwun、-e)によって訳されているかを調べた。その結果は以下のようである(用例は(8)～(11))。

表 2. 日本語の断定形の知覚表明文・知識表明文と韓国語の終結語尾の対応

対訳本＼原本	知覚表明文	知識表明文
-ney	96(24.1)	0(0.0)
-kwun	51(12.8)	0(0.0)
-ci	0(0.0)	187(17.9)
-e	251(63.1)	856(82.1)
計(%)	398(100.0)	1043(100.0)

結果をみると、-ney と-kwun には「知覚表明文」のみが、-ci には「知識表明文」のみが対応しているのに対して、-e は「知覚表明文」と「知識表明文」の双方に対応していることが分かる。

特に、韓国語における「知覚表明」の-ney・-kwun と「知識表明」の-ci による有標的な区別と日本語の断定形の対応関係は、次節で述べる感動詞や叙法副詞との共起関係によっても支持される。

4．驚き・戸惑いの感動詞と断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞との共起関係

前節では日韓対訳本の調査を通して日本語の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾の間における対応関係を確認したが、本節では日本語の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾の間に共通している言語現象を確認し、両者の対応関係を検証する。

驚き・戸惑いを表す感動詞と断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞との共起関係において、日本語の断定形の「知覚表明文」と「知識表明文」という意味分類は、韓国語の終結語尾(-ney・-kwun と-ci)と平行した現象を見せる。

まず、文末形式の区別のない日本語の断定形の場合を確認する。(19)は雨が降っているという、視覚で捉えられた発話時の眼前の事態を表す「知覚表明」の文であり、(20)は雨が降ったという、話し手が直接体験したことが知識として定着されている内容を表す「知識表明」の文であるが、次のような感動詞と叙法副詞との共起関係においては、対立的な現象が見られる。

(19)(ドアを開けたら、雨が降っているのを見て)

{**オット**、**アッ**/??**モチロン**、??**タシカ**}雨が降っている。

(20)(昨日雨が降ったのを記憶していて)

{??**オット**、??**アッ**/**モチロン**、**タシカ**}昨日雨が降ったよ。

「オット、アッ」は周囲の状況の変化や新しい情報などに遭遇した際に、驚き、ある

いは戸惑いを表す感動詞である(森山 1996、日本語記述文法研究会 2009 参照)。このような驚き・戸惑いの感動詞は「知覚表明」の文とは共起が自然であるが(用例(19))、「知識表明」の文とは共起が不自然である(用例(20))。

そして、「モチロン」は話し手にすでに確認された事態(の報告)について断定(確認)を表す副詞であり(工藤 2000 参照)、「タシカ」は当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す副詞である(杉村 2009、森本 1994、安達 1999 参照)。このような 断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞は「知識表明」の文とは共起が自然であるが(用例(20))「知覚表明」の文とは共起が不自然である(用例(19))。

次は文末形式の区別のある韓国語の終結語尾の場合を確認する。(21)は日本語の(19)と同じ文脈で同じ内容を表す「知覚表明」の文であり、終結語尾は-ney である。(22)は日本語の(20)と同じ文脈で同じ内容を表す「知識表明」の文であり、終結語尾は-ci である。このように「知覚表明」を表す-ney と「知識表明」を表す-ci は、日本語と同様に、驚き・戸惑いを表す感動詞と断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞との共起関係において、対立的な現象が見られる。

(21) (ドアを開けたら、雨が降っているのを見て)

{**어어**, **어머**/??**물론**, ??**아마도**} 비가 오**네**.

{ee, eme/??mullon,??amato}pi-ka o-aa-**ney**.

[{オット、アレッ、/??モチロン、??タシカ}雨-が　降る-終結]

({オット、アレッ、/??モチロン、??タシカ}雨が降っている。)

(22) (昨日雨が降ったのを記憶していて)

{??**어어**, ??**어머**/**물론**, **아마도**} 어제 비가 왔**지**.

{??ee, ??eme/mullon, amato} ecey　pi-ka w-ass-ci.

[{??オット、??アレッ、/モチロン、タシカ}昨日　雨-が　降る-過去-終結]

({??オット、??アレッ、/モチロン、タシカ}昨日雨が降った。)

「어어(ee)、어머(eme)」は日本語の「オット」や「アレッ」に当る、驚き、あるいは戸惑いを表す感動詞である(Choi,H.C. 2003 参照)。このような驚き・戸惑いの感動詞は「知覚表明」を表す- ney とは共起が自然であるが(用例(21))、「知識表明」を表す-ci とは共起が不自然である(用例(22))。

そして、「물론(mullon)」は日本語の「モチロン」に当たる断定(確認)を表す副詞であり(Seo,J.S.2005 参照)、「아마도(amato)」は日本語の「タシカ」に当たる不確かな記憶の想起を表す副詞である(「아마도(amato)」は日本語の「タブン」に当たる未知の推測を表すこともできる。詳細は次節で述べる)。

このような断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞は「知識表明」を表す-ci とは

共起が自然であるが(用例(22))「知覚表明」を表す-ney とは共起が不自然である(用例(21))。ここまでの内容をまとめると、次のようである。

表 3. 日韓両言語における感動詞と叙法副詞の共起関係

	文末形式		共起関係	
	日本語	韓国語	驚き・戸惑いの感動詞	断定・不確かな記憶の想起の叙法副詞
知覚表明	断定形	-ney/-kwun	○	×
知識表明	断定形	-ci	×	○

では、このような言語現象はなぜ起こるのかについて、考えてみる。まず「知覚表明」の文は、話し手が発話時に新しい事態や情報に接して、その未知の事態や情報を知覚で捉えた内容を表明する文である。話し手は発話時に初めて接した未知の事態や情報をどのように理解してよいか分からず、驚いたり、戸惑ったりするのが普通であって、確かか、不確かかのように確信度で位置づけることがまだできない状態であろう。そこで「知覚表明」の文は、驚き・戸惑いの感動詞とは馴染んで、断定・不確かな記憶の想起の叙法副詞とは馴染まないわけである。

そして「知識表明」の文は、話し手にとって既に知識として定着している内容を表明する文である。話し手は、既に知識として定着している内容に対して、いまさら驚いたり、戸惑ったりする必要がなく、記憶が鮮明な場合は確かな情報として、また記憶が不明な場合は不確かな情報として位置づけることができるであろう。そこで「知識表明」の文は、 断定・不確かな記憶の想起の叙法副詞とは馴染んで、驚き・戸惑いの感動詞とは馴染まないわけである。

このような感動詞や叙法副詞との共起現象から、「知覚表明」と「知識表明」という区別は、その区別を表すための文末形式の区別を持っている韓国語のみならず、文末形式の区別を持たない日本語においても、有意なことであることが分かる。こうして、日本語の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾の形式の分化のし方が対応していることが検証できたと考えられる[17)]。

５．不確かさを表す副詞

前節で、不確かな記憶の想起を表す副詞において、日本語と韓国語の間に、少しずれがあることを述べた。本節では、その点について簡単に補足する。

まず、不確かさには二種類があることを確認しておく。森山(1995)で、「不確かさ」には、直接経験をしていても忘却したための不確かさ(以下、「不明な記憶(知識)」とする)

と間接的な情報内容、つまり未知のものを推測するという不確かさ(以下、「未知の推測」とする)があると指摘している。

日本語ではこのような二種類の不確かさを表すために次のように異なる副詞を用いる。

(23)昨日は{タシカ/??タブン}日曜日だったね。(杉村 2009:173(17)と(18)一部改変)
(24)明日は{??タシカ/タブン}学校に行くだろう。(杉村 2009:169(1)一部改変)

(23)のように文の内容が話し手の記憶にありながら、不確かになった「不明な記憶(知識)」を表す場合は、タシカは自然で、タブン(あるいはオソラク)は不自然である[18]。しかし、(24)のように文の内容が話し手にとって未知のことであり、それを推測しているという「未知の推測」を表す場合は、タブン(あるいはオソラク)は自然で、タシカは不自然である。

しかし、韓国語では前節で少し触れたように、このような二種類の不確かさを「아마도(amato)」という一つの副詞で表している。

(25)어제는 **아마도** 일요일이었지. ecey-nun amato ilyoil-i-ess-ci.
[昨日-は タシカ 日曜日-指定詞-過去-終結] (昨日はタシカ日曜日だったね。)
(26)내일은 **아마도** 학교에 갈 것이다. nayil-un amato hakkyo-ey ka-lkesi-ta.
[明日-は タブン 学校-に 行く-推量-終結](明日はタブン学校に行くだろう。)

(25)の「不明な記憶(知識)」の場合であれ、(26)の「未知の推測」の場合であれ、「아마도(amato)」という一つの副詞で表している。ここまでの内容をまとめると、次のようである。

表 4. 二種類の不確かさと副詞

	不明な記憶(知識)	**未知の推測**
日本語	タシカ	タブン・オソラク
韓国語	아마도(amato)	아마도(amato)

このような結果から、二種類の不確かさを表すために、日本語ではそれぞれの副詞が分化しているが、韓国語では分化せず一つで表していることが分かる。

日本語と韓国語において、このような不確かさを表す副詞においてずれているということと、前節で述べた、「知識表明」と「知覚表明」を表す文末形式の区別の有無を照らし合わせると次のようなことが言える。日本語では「知識(記憶)表明」を表す文末の形式を有さないので、それを表すための専用の副詞を設けて補っているが、韓国語では「知

識(記憶)表明」を表す文末の形式を有するので、それを表すための専用の副詞を設ける必要がなかったと考えられる。

６．終わりに

本稿では、日韓両言語の文末形式を対照し、以下のような点を明らかにした。

・日本語の終助詞と韓国語の終結語尾の間には直接的な一対一の対応関係が見られず、日本語の平叙文の断定形の意味分類(「知覚表明」と「知識表明」)と韓国語の終結語尾が担う意味の間において、より密接な対応関係が見出された。

・日本語では「知覚表明」と「知識表明」との違いを表すための文末形式の区別がなく、ともに断定形で表すことが可能だが、韓国語では両者の違いを表すための文末形式の区別があり、終結語尾の選択によって両者を区別している。即ち、-ney と-kwun は「知覚表明」を表し、-ci は「知識表明」を表し、-e は「知覚表明」と「知識表明」双方を表す。

・ 驚き・戸惑いを表す感動詞、また断定や不確かな記憶の想起を表す叙法副詞との共起関係において、日本語の断定形の「知覚表明」と「知識表明」という意味分類と韓国語の終結語尾(-ney・-kwun と-ci)が平行していることから、日本語の断定形の意味分類と韓国語の終結語尾の対応関係が支持される。

本稿では、「知覚表明」を表す-ney と-kwun の違いや、-ci の派生的な用法(「確認要求」「説明疑問文(wh 疑問文)」「命令」「勧誘」「意志」)と日本語との対照については触れなかった。これらの点は今後の課題とする。

註

1) 韓国語の終結語尾は、文の最後に位置して、文を終結しながら、文の類型(平叙・疑問・勧誘・命令など)及び、対者敬語法(丁寧体・普通体)を表し分ける意味・機能を持っている。

2) 韓国語の対者敬語法(韓国語学では「文体」という用語でもよく使われる)は、해라(hayla)体、하게(hakey)体、하오(hao)体、합쇼(hapsyo)体、해(hay)体、해요(hayyo)体のように、6 等級に分かれる。해라(hayla)体、하게(hakey)体、해(hay)体は「普通体」に当たり、하오(hao)体、합쇼(hapsyo)体、해요(hayyo)体は「丁寧体」に当たる。해(hay)体・해요(hayyo)体は、主にうちとけた場面で使われる「非格式体」であるのに対して、その他の対者敬語法は主にかしこまった場面で使われる「格式体」である。特に、해요(hayyo)体は、해(hay)体に「丁寧さ」を表す終結助詞요(yo)を付けて作られる。本稿では、해요(hayyo)体と해(hay)体を総称して hay(yo)体と表記する。

3) 韓国語のローマ字表記は Yale 式に従う。

4) 例えば、平(2009)では日本語のネと韓国語の-ney、また日本語のヨと韓国語の-ci を対応させて分析している。

5) 本稿では、韓国語における対者敬語法の 6 等級の終結語尾のうち、해(요)(hay(yo))体の平叙文の終結語尾のみを対象とする。それは次のような理由からである。まず、하게(hakey)体と하오(hao)体は、一部の階層や方言においてはまだ使われているとの指摘もある(Han,K.(2006)参照)が、現代韓国語の標準語としてはあまり使われなくなっているので対象外とする。そして、해라(hayla)体と합쇼(hapsyo)体の平叙文の終結語尾は、基本的に-는다(-nunta)(해라(hayla)体)と-습니다(-supnita)(합쇼(hapsyo)体)一つだけであって(Han,K.(2006)参照)、これらは日本語の終助詞ではなく断定形(ル・タ)に対応していると普通考えらている。本稿では、この考え方には異議がないので、해라(hayla)体と합쇼(hapsyo)体の平叙文の終結語尾は対象外とする。

6) 以下、特定の言及がない限り、終結語尾と言うと hay(yo)体の終結語尾を言うことにする。

7) 本稿で対象としている言語資料は、最後の頁参照。用例に出典がないのは作例である。

8) Han,K.(2006)では hay(yo)体の平叙文の終結語尾を複合形(-ulanikka、-nuntako など)と単純形とに分類するが、本稿ではさらに単純形を接続語尾としても使われるもの(-nuntey、-ko など)と純粋に終結語尾としてのみ使われるもの(-ney、-ci、-kwun、-e)とに分けて後者のみを対象とする。このうち、-e は接続語尾とも考えられる可能性がある。しかし、接続語尾の-e は過去の-ess-や推量の-kess-が接続不可能であるが、終結語尾の-e は他の終結語尾と同様に、-ess-や-kess-が接続可能なので、本稿では接続語尾の-e と終結語尾の-e は別の形式として見なす。

9) 終結語尾の-kwun は、接続する環境によって、異形態が存在する(動詞語幹＋-nunkwun、形容詞語幹＋-kwun、指定詞語幹＋-(lo)kwun、-ass-(過去)/-kess-(推量)/-te-(回想)＋-kwun)。そして、本稿では、基本的に-kwuna も、-kwun の異形態として見なす。ただし、研究者によっては、-kwuna が縮約して-kwun になったとし、-kwuna を-kwun と同じ hay 体として取り上げる場合(Heo,W.2000)もあれば、 -kwuna は -kwun とは違って、 hayla 体として取り上げる場合もある(Han,K.2006)。しかし、本稿では-kwuna と -kwun は 意味機能においてほとんど変わらないし、対者敬語法においても hayla 体のものと hay 体のものの区別がしにくいので、-kwuna を -kwun の異形態として見なすことにする。

10) ルとタの対立を基本とする断定形を対象とし、準体助詞由来の形式(ノダ、コトダ、ワケダなど)を持つ断定形は対象外である。

11) -ci は「確認」を表し、-ney と-kwun は「感嘆」を表すという分析(Seo,J.S.(1996)、Noh,D.K(1997)参照)もある。しかし、「確認」や「感嘆」という分析からは、(14)や(15)のような現象、そして 4 節で取り上げる感動詞や叙法副詞との共起関係が説明できないだろう。そこで本稿では Jang,K.H.(1985)と Park,J.Y(2006)の分析に従うことにする。

12) -ney と-kwun は基本的に置き換えできる類義関係にあり、両者の間には共通点が多い。しかし,全ての場合において、置き換えができるわけではなく、両者の間には相違点もある(Jang.K.H.1985、 Park,J.Y.2006 参照)。本稿では、-ney と-kwun が「新たに知ったことを表す」

という共通点を重視して、両者を同じ系列として見なすことにする。

13) 中立的な-e と他の形態との違いも見られる。例えば、-e と-ci の場合において、次のように当該情報が「既に知っている内容」であっても、置き換えが不自然な場合がある(＃は当該の文脈では使用が不自然であることを表す)。

（ｉ）A:어제 오전에 집에 있었어? （昨日、午前中、家にいた?）

B:응, 집에 있었지. （うん、家にいた。）

A:집에 전화했는데 안 받던데. （家に電話したけど、出なかったよ。）

B:아니야. 집에 있었{어/#지}. aniya. cip-ey iss-ess {-e/#-ci}.

［いや。 家-に いる-過去-終結］（いや。家にいたよ。）

（ｉ)は、話し手(B)の「昨日家にいた」という過去の経験であっても、-ci に置き換えると不自然である。（ｉ）の文脈を見ると、当該の情報に対して話し手と聞き手の間にずれがある。つまり、話し手(B)は「昨日家にいた」と言うが、聞き手(A)は「家に電話したけど出なかった」ということから「(話し手が)家にいた」とは考えていない。談話において、このように話し手の「既に知っている内容」が聞き手とずれている場合は有標的な-ci よりは中立的な-e が自然である。このような言語現象は次のように説明できると思われる。普通、当該情報に対して話し手と聞き手の間にずれがあると話し手は当該情報を再考(再確認)する必要が生じるだろう。そこで、聞き手とのずれを調整するために(当該情報の真偽を再確認するために)、当該情報に対して、知識という点よりは真偽の方に重点が置かれ、有標的な-ci よりは中立的な-e が選択されると考えられる。このような言語現象と関連して、-ci と-e が置き換え可能な場合であっても、中立的な-e が選択されると話し手は当該情報に対して知識という点よりは真偽に重点を置いていると言えるだろう。-e と-ney・-kwun の場合も同様に、中立的な-e が選択されると話し手は当該情報の真偽に重点を置いて発話していると考えられる。

中立的な-e の選択には、このように談話･語用論的な要因が働いていると思われるが、さらに分析が必要である。今後の課題としたい。

14) 代表的な例として、佐久間は「品定め文」と「物語文」に分類し、この分類は述語の品詞性に対応するとした(前者は名詞文・形容詞文、後者は動詞文)。そして、三尾(1948)は場との関連において(いわゆる一語文や省略文にあたる「未展開文」や「分節文」を除くと)「判断文」と「現象文」に分類し、課題(主題)の有無に対応するとした(前者は有題、後者は無題)。その後、以上のような分類が必ずしも品詞性や主題の有無と対応しないことが指摘された(丹羽 1988、田野村 1990 参照)。本稿では、丹羽(1988)と田野村(1990)に従い、概言の形式(ヨウダ、ラシイ、カモシレナイなど)が付くものとタブン、キットなどの確信度副詞を取りうる断定形を「判断文」とし、タブン、キットなどの確信度副詞を取りえない断定形を「現象文」とする。

15) 用語の違いはあっても、認識のもダリティの観点からも似ている分析があり、「眼前描写文」と「知識表明文」という区別を「感覚器官による直接的な捕捉」と「既得情報」という区別で説明している(仁田 2000、宮崎 2002 参照)。

16) 用例の「知覚表明」あるいは「知識表明」という判断は、筆者の直観で行った。丹羽(1988)と田野村(1990)でも指摘しているように、日本語において「知覚表明」と「知識表明」の区別は明確な形態及び構文による区別ではなく意味的な区別であるので、述語の種類や文脈などによって「知覚表明」と「知識表明」との区別が曖昧な場合も多くあった。本稿では非過去の感情表現、可能表現、希望表現、評価表現、思考動詞などその区別が困難な場合は対象外とした。

17) より厳密な検討が必要であるが、このような「知覚表明」と「知識表明」という区別は「情報の出所(the source of information)」を表す evidentiality という文法カテゴリーと関係があると考えられる(その中でも特に直接証拠(direct evidence)と)。「知覚表明」は文の内容の出所が話し手の知覚内容であることを表しており、「知識表明」は文の内容の出所が話し手の知識内容であることを表していると言えるだろう。このような evidentiality に関する通言語学的な分析を見ると、"Every language has some way of referring to the source of information, but not every language has grammatical evidentiality. (Aikhenvald2004:10)"としている(Willet1988:66 も参照)。このような観点からすると、「知覚表明」と「知識表明」を表すために、韓国語は文末形式の区別を持つ言語であるのに対して、日本語は文末形式の区別を持たない言語であると言えるだろう。

18) タブンを用いて、「不確かな記憶(知識)」を表すことが完全に不可能であるわけではなく、次のように文末に「ト思ウ」という思考動詞をつけるとできるという指摘がある。
(ｉ)「図書館の休館日はいつですか? 」「たぶん、月曜日だったと思います。」(宮崎 1992(69))
しかし、このように文末に「ト思ウ」という思考動詞をつけても不自然であるという指摘もある(杉村 2009:172)。

参考文献

安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版.

杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房.

平香織(2009)「韓国語の半言と日本語の終助詞の類似点・相違点の提示－半言の用法分類からの試みー」『日本言語学会　第 138 回予稿集』、日本言語学会、pp. 124-129.

田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジア諸言語と一般言語学』三省堂、pp. 785-795.

仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店、pp. 79-159.

日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 7 第 12 部談話　第 13 部待遇表現』くろしお出版.

丹羽哲也(1988)「有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題(上・下)」『国語国文』第五十七巻第六・七号、京都大学文学部国語国文学研究室、pp. 41-58(上)、pp. 29-49(下).

野間秀樹(1997)「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語との対照研究Ⅳ　日本語と朝鮮語（下巻）　国立国語研究所』くろしお出版、pp. 103-138.
宮崎和人(1992)「現代日本語の判定文について」『広島修大論集　人文編』32-2. pp. 35-63.
宮崎和人(2002)「認識のモダリティ」『新日本文法選書 4 モダリティ』くろしお出版、pp. 121-171.
三尾砂(1948)『国語法文章論』三省堂.
森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版.
森山卓郎(1995)「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～0-不確実だが高い確信があることの表現」『日本語類義表現の文法(上)単文編』宮島達夫･仁田義雄(編)、くろしお出版.
森山卓郎(1996)「情動的感動詞考」『語文』65、大阪大学国語国文学会、pp. 51-62.
Noh,D.K.노대규(1997)『한국어의 감탄문』국학자료원 .
Park,J.Y.박재연(2006)『한국어 양태 어미 연구』國語學會.
Seo,J.S.서정수(1996)『수정증보판 국어문법』한양대학교출판원.
Seo,J.S.서정수(2005)『한국의 탐구 32 한국어의 부사』서울대학교출판부.
Jang,K.H.장경희(1985)『現代國語의 樣態範疇研究』塔出版社.
Choi,H.C.최호철(2003)「현대 국어 감탄사의 분절 구조 연구-감정감탄사를 중심으로-」『한국어와 모국어정신』국학자료원.
Han,K.한길(2006)『현대 우리말의 형태론』역락.
Heo,W.허웅(2000)『<고친판> 20 세기 우리말의 형태론』샘문화사.
Park,J.Y.박재연(2006)『한국어 양태 어미 연구』國語學會.
Aikhenvald,A.Y.(2004).*Evidentiality*.Oxford U.P.
Willet,T.(1988).A Cross-Linguistic survey of the grammaticization of evidentiality.*Studies in Languages* 12-1:51-97

●調査した日韓対訳本(【　】は用例の略号)

村上龍(1994)『五分後の世界』【五】/이창종(1995)『오분후의 세계』【오】、大江健三郎(2005)『さようなら、私の本よ！第 1 部』【本】/서은혜(2008)『책이여 안녕 제 1 부』【책】、綿矢りさ(2003)『蹴りたい背中』【蹴】/정유리(2004)『발로 차 주고 싶은 등짝』【발】、小川洋子(2003)『博士の愛した数式』【博】/김난주(2004)『박사가 사랑한 수식』【박】、江國香織(2001)『東京 タ ワ ー 』【東】/신유희(2005)『도쿄타워』【도】、桐野夏生(1999)『柔 ら か な 頬(上)』【頬】/권남희(2000)『부드러운 볼(1)』【볼】、宮部みゆき(2003)『ブレイブ・ストーリー第 1 部』【ブ】/김해용(2006)『브레이브 스토리(1)』【브】、吉本ばなな(1988)『哀しい予感』【哀】/김난주(2007)『슬픈 예감』【슬】